

大成山普門院の成り立ち

織本重道 (大宮郷土史研究会)

● 普門院の資料に記述された成り立ち：

室町時代のある晩のこと、**一人の僧**が武蔵一宮氷川大明神にお祈りされていた。そこに**一人の老翁**が現れ、僧に告げていうには、あなたはとても徳が高い。必ず仏法の靈験が現れるだろう。また老翁は神主の前にも現われ、告げていうには、拝殿に高僧がいる。ここから西に観音堂がある。必ずその地に留めよ、といい終えて消えた。そこで、神主はその僧を案内し、その土地の**領主金子駿河守**にこの旨を伝えた。領主はたちまちその僧に帰依し、観音堂の地に陣屋屋敷を添えて寺を作り、観音菩薩を本尊にし、寺号を普門院とした。**この金子駿河守が普門院の開基、この僧が開山月江正文である**。応永33年(1426)のことであった。

出典：元禄16年(1703)2月22日付の普門院20世大豊国栄から三箇寺宛の「乍恐以書付常恒結制奉願候事」 意訳：織本重道

● 他の資料に記述された成り立ち：

月江正文は修業して歩き武州足立郡に着いた。その景色の美しさに感動し、普門院を建立し過ぎた。近くの里に**氷川神社**があった。いつも**老人**が来て説法を聞いていた。ある夜部屋に入り受戒を願った。月江正文は金剛宝戒を授けた。老人は大変喜び礼拝していうには、私は正法を護ることを誓うと。言い終わって姿を消した。

出典：江戸青松寺20世嶺南秀徳『日本洞上聯燈録』享保12年(1727) 意訳：織本重道

資料に見られる「老翁」や「老人」は氷川の神を意味すると言われ、普門院は開山以来、氷川神社と非常に近い関係であることがわかる。江戸時代では、正月三日に氷川神社は普門院に年始の挨拶をする。神主がなくなる際、真っ先に普門院に連絡を取り、普門院は亡くなった神主に戒名を与えた。亡くなった神主は戒名と神道の靈号の両方を持った。氷川神社の神主は個人墓地を持ち、氷川神社の社人は普門院に墓地があったが、明治維新の神仏分離以降に、氷川神社の東側に共同墓地が作られ、神式に改葬された。

● この段階に見られる重要人物

普門院の開山：月江正文 (げっこう しょうぶん)

室町時代の曹洞宗の僧。美濃国補陀寺の無極慧徹に師事、無極慧徹の後を継ぎ、上野国補陀寺、武蔵国龍穩寺等の住持となった。尾張国楞嚴寺、上野国双林寺、武蔵国普門院を開いた。寛正4年(1463)1月22日楞嚴寺で死去。

『月江正文和尚頂相』は月江和尚の自画像。昭和31年(1956)に県指定文化財。「頂相」という禅僧の肖像画は、法を継いだ印として師から弟子へ与えられるもの。室町時代中期以降の作と考えられる。

参考：https://www.city.saitama.lg.jp/004/005/006/001/017/011/002/p000155.html

普門院の開基：金子駿河守

武蔵七党の内、村山党金子氏の一族。村山党の頼家は周辺地域に分散、各地の開発領主に。頼家三男家範は入間郡金子郷に住んで金子六郎と称した。その二男十郎家忠は父の遺領を継ぎ、鎌倉幕府創建に貢献、子孫は南北朝～室町時代、鎌倉公方に仕えた。その後主君を変え、17代政熙は京都所司代板倉勝重の家臣となり、後代々板倉家に仕えた。普門院開基の金子駿河守は金子十郎家忠という説や、その三代後の家光という説があるが、史料的に不確実。



月江正文和尚頂相

法被を掛けた曲裾に袈裟を着け、右手に仏子を持ち、足元に沓床とその上に沓という頂相の形式に則り、素絹に極彩色で描く。各所に金彩を施し、法被は竜や花の文様を描き、細部の模様を念入りに描き出す。この絵画は普門院から埼玉県立歴史と民俗の博物館へ寄託されている。



普門院にある金子駿河守の墓

中央の墓石は、昭和33年3月に42世道山師改修。

訃報

- 岩田 喜代士-----8区
- 龍島 祐-----6区
- 松本 静枝-----8区
- 辻村 はな子-----3区
- 石垣 進-----6区
- 和田 清隆-----8区
- 小幡 三枝-----1区
- 豊田 昌子-----3区
- 杉本 慎吉-----2区
- 井原 英子-----3区
- 竹之木進 貫治-----5区
- 三友 正次-----8区
- 野本 由紀-----5区
- 中村 芳元-----4区
- 島田 勝行-----6区
- 杉崎 ひさ-----4区
- 下田 セツ-----5区
- 永村 せつ-----3区
- 東 幸二-----7区

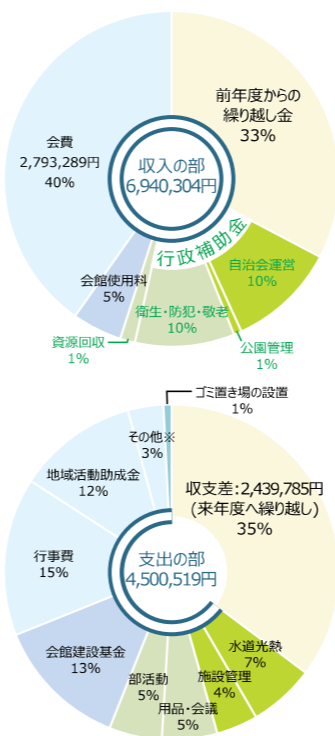
ご冥福をお祈りします。
(令和6年12月～令和7年12月末)

大成町二丁目

第26号

令和8年5月
地域づくり誌

自治会の決算報告(令和7年度)



※ 自治会活動保険63,770円、弔慰金63,000円、雑費57,607円、交通安全協会制服代50,051円が含まれている。



サマー・フェスティバル/2025.8.23/大成小学校

地域のスポーツ活動

大宮大成サッカースポーツ少年団

● 大成サッカースポーツ少年団のあゆみ

当団は昭和57年(1982年)3月、当時の大成小学校長及びPTA会長のご理解により「大成少年少女サッカークラブ」として誕生しました。募集したところキャプテン翼ブームもあり、137名もの応募がありました。チーム名も「大成サッカースポーツ少年団」とし少年団登録し、正式に活動を開始しました。しかし少人数の指導者しか見つからず、軌道に乗れず初勝利まで19試合目と苦難のスタートでした。そんな大成サッカー団も近隣のチームや色々な方々のご指導により、各種大会で優勝出来るほどになりました。

● 山口監督からのメッセージ

お子様は走るのが好き、ボール蹴ってみたい！その気持ちがあればもう充分です。大成では技術だけでなく、一生モノの絆と「考える力」を育てます。仲間とパスを繋ぎ、ゴールを目指すワクワクと一緒に体験しませんか？

● 保護者の皆さまへ

当団は一人ひとりの個性を大切に、心身の成長を全力でサポート！まずは見学・体験から、お子様のキラキラした笑顔を見に来てください！

活動拠点：

大成小学校の校庭を中心に活動。さいたま市北部少年サッカー指導者協議会に所属し、主催の公式戦に参加、また招待大会、トレーニングマッチ等のたくさんの試合に参加します。

対象：

未就学児(年長)から小学校6年生までの男女。

所属団員：

大成小学校の児童を中心に、近隣の三橋小、日進小、つばさ小、東大成小などの子供たちも在籍しています。

活動内容：

サッカーの技術習得だけでなく、集団生活を通じた協調性や礼儀などの育成も重視しています。

団のポリシー：

親子で楽しめるサッカー団を目指し頑張っていきます。



令和6年度第20回さいたま市北部U-12サッカー卒団大会で優勝

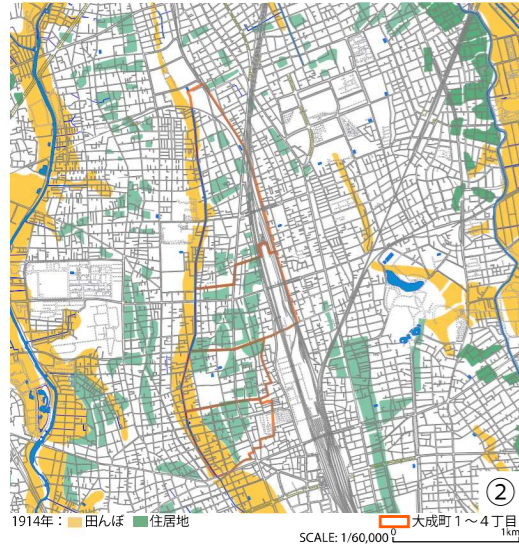
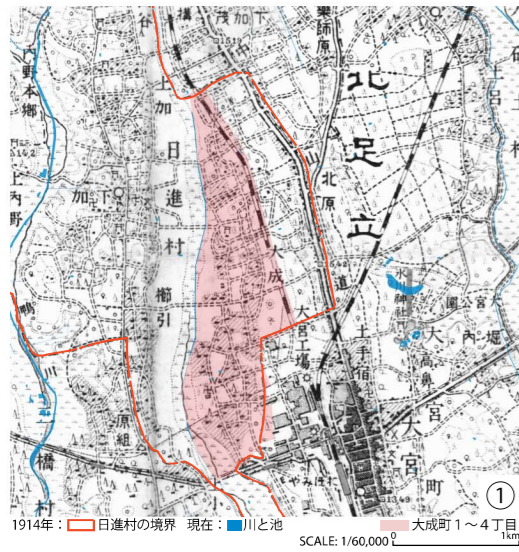


大宮RBアルディージャの前座試合、NACK5スタジアム



大成の紋理： - シマシマからバラバラ、その先の町を考える -

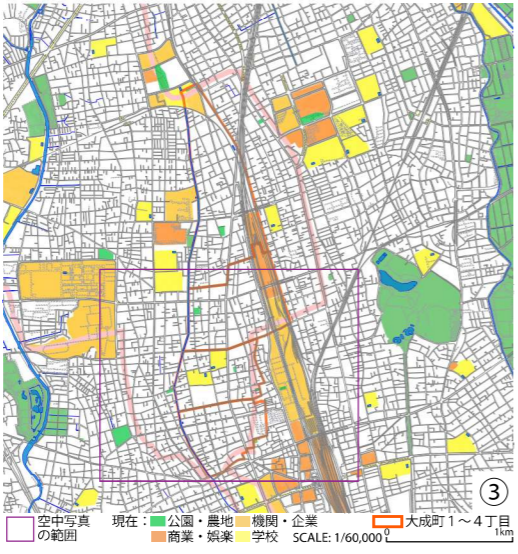
これだけ工業と農業、近代と旧来がぶつかり合った町、日本においてどれだけあるのだろうか。現在の大成周辺地図と重なって見たのは、明治末期に測図、大正3年に鉄道補入、大正5年に発行された大宮の地形図である(①)。当時の大成周辺は鴨川、切敷川、芝川に沿って田んぼが広がり、集落は田んぼの近くに集まる。中山道に沿って町があり、さらに鉄道が通され、シマシマな農村環境であった(②)。東西方向に川、田んぼ、集落、荒地、畑、森、鉄道、中山道といった複数のレイヤーがあり、多様な主題の空間が楽しめると思える。一方で、現在の大成周辺では様々な施設がバラバラに集



約されている(③)。この現状は一見シマシマ文脈に相違するように見えるが、実はシマシマ文脈の反転であり、余白に近代的な産業がぶつかってきた結果である。

昭和までには、田んぼも住居もなかった場所に近代的な工場や学校等が作られ、それらの跡地が多機能な施設開発に生まれ変わった。そして戦後の農地解放に伴い、田んぼが埋め立てられ、学区としての住宅地が広がり、旧来の有機的な農村の紋理は今の道路網に残されているぐらいであった。昔の屋敷では日頃手入れされた庭があり、緑豊かな住居は普通だったが、近代化が進むにつれ、大規模な公園は鴨川、芝川、氷川神社に接して整備され、緑豊かな環境は公的な体験になってきた。明治後半から近くで大宮工場(図1)が作られた大成の農村では、農地開放以前から「住宅の洪水」が到来し(④)、数十年の中で、鴨川と芝川の間、切敷川(図2)の両側には住宅に満ちている新たな余白になった。

百年前の地図にあった余白から近代化が進んだように、今後のまちづくりは、新たな余白に目を向ける必要があるかもしれない。フラットな住宅街と道路網として反転された余白には、本来「帯のように繋がる」性格があることは無視できない。そして街区スケールで住宅街を見ると、広域の町スケールに類似したバラバラな構成があることも重要な現実である(図3)。バラバラでありながら帯のような繋がりを作るには、おそらく草間彌生の水玉模様のような柔軟で自由な秩序が必要であり、逆にそういう視点から大成の町構造を理解すれば、ポジティブに発展する可能性が見えてくる。普門院の北側と東側は昔から人が住んでいるエリアであり、それぞれのエリアにある普門院、公民館と自治会館は町の重心を示す。長い歴史で作り上げられた町の骨格を丁寧になぞり、新たな場所の可能性を探り作ってみよう。



昭和21年(1946)の空中写真 大成町1〜4丁目 SCALE: 1/15,000



図1: 大宮工場(1965年頃)



図2: 大成町二丁目の田植風景(1979年)

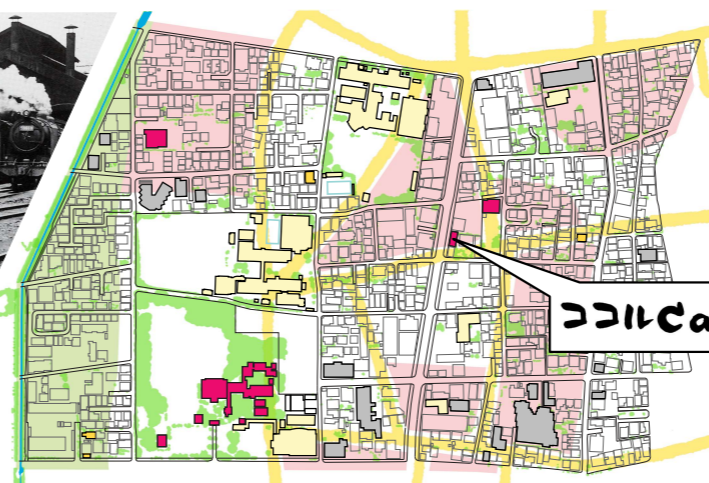


図3: 二丁目にあった明治末期の田んぼ、住居と里道 田んぼ 住居地 里道 現在の重要施設
出典：
①=https://lapis.nichibun.ac.jp/chizu/map_detail.php?id=001911064
②=https://service.gsi.go.jp/map-photos/app/map?search-photo
図1=『写真が語るさいたま市の100年』2021、佐々木高史、いき出版、p198
図2=『ふるさとのあゆみ〜大成・東大成・櫛引のまち〜』1995、ふるさとのあゆみ1刊行委員会、p82

地域施設の宣伝

ココルCafe

オープンしました！

公式SNSはこちら

SCAN ME!

ケーキセット

おにぎりプレートランチ



日高屋のすぐとなり！

cafe time



埼玉県さいたま市大宮区大成町2-175-5
TEL:090-2489-6210
営業時間/10:00~16:00
(LUNCH 11:30~14:00)
定休日/月曜日
(土・日はレンタルスペースのみのためCafeはお休みとなります)



大成町建築班の活動

「大成町建築班」の目的
実験的な取り組みとして自治会主導のまちづくり活動を行い、大学の建築学科が行うような社会活動を実践する。第一に、町の研究活動を行う。町の昔と現在をもっと知り、より持続的な町のあり方について皆さんと一緒に考える。第二に、町の提案活動を行う。研究の成果を踏まえ、地域再生の可能性を地域文脈から読み取り、住民の意志と地域の底力をボトムアップ的に町のあり方に反映するような提案を検討する。

班員の募集
建築関係者、建築系学生だけではなく、地域づくりに興味のある方々、ぜひメールをください！
oonari.2chome@gmail.com



【連載】下の川のひとり言 薄田忠夫

『下の川のひとり言』は元自治会長の薄田忠夫が、平成25年(2013年)に書いた散文である。

消防団制度は徳川時代から自警消防組織として一村一自警団が形成されていたと推察します。大成村、櫛引村、上加村(日進)と過去の歴史を見ると日進村も三分団に区別され、それぞれ日進、大成、櫛引消防団と現在も継承されて、昔は台車にポンプを積み込み手押しポンプで消火にあたりました。昭和十一年(一九三六年)私達が子供の頃、関日本家の裏の所に消防ポンプ小屋があり関日本家で管理していました。

昔の大成町二丁目は、単に大成村と呼んでいました。大成村は、江戸期〜明治二二年の村名。武蔵国足立郡大成村又は武州足立郡大成村と呼ばれていました。寛永六年(一六二九年)六月足立郡大成村下組田畑屋敷帳(大成町二丁目の関口喰貴男家古文書)によると、大成村は上大成村と下大成村に区分されており、其々名主が居たという。しかし江戸期の村民は、上大成、中大成、下大成と三つに区分して呼んでおりました。それは、上大成に稲荷社、中大成に秋葉社(現八雲社)、下大成に八幡社が鎮座し、それぞれ各自の神社を中心に独自の行事を行っていたので通称三つの区分で呼んでいたのではないかと言われています。この上大成、中大成、下大成の区分は「下の川」の上流、中流、下流に位置していたので自然に呼ばれるようになったのではないかとされています。普門院の江戸時代の墓石を見ると、大成上村、大成中村、大成下村、又は上大成、中大成、下大成と彫ってあります。余談ですが大成町二丁目の皆さん、大成という土地を切開いた祖先のお墓を散策して感謝の意を伝えるのもよいでしょう。上大成は東大成町一・二丁目と、大成町四丁目。中大成は大成町三丁目。下大成は二つに区分され、大成町二丁目、大成町二丁目町名変更、昭和三十三年(一九五七年)に施行、この中の東大成町一丁目、二丁目は植竹地区、大成町四丁目は日進地区のため、大成町一・二・三丁目、大成地区となり、その他に町名が違いますが昔から学区が同じだった櫛引町一丁目が仲間入りしました。